

3月8日（日）主日礼拝レジュメ

「完全な愛」 ヨハネの福音書13章1, 2節

1節の新改訳聖書第三版の訳は「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された」特に「世にいる自分のものを愛されたイエス」から新改訳2017では「世にいるご自分の者たちを愛してきたイエス」と訳し変えられている。さらに「その愛を残るところなく示された」が「彼らを最後まで愛された。」と訳し変えられている。ここは残るところなくでも、最後まででも、どちらの訳も可能。

「過越の祭りの前のこと」とあるが、過越の祭りは、エジプトで奴隷生活を送っていたイスラエル人がエジプトを脱出する夜、神よりの命令に従って門柱とかもいにつけた小羊の血を見て、主がその家の初子を打つことなく過ぎ越されたことと、その夜彼らはほふった子羊を種を入れないパンと苦菜を添えて食し、まだ種を入れていない練り粉を鉢ごとかついで大急ぎで出発し、主の御手により救出されたことを記念し、子孫に伝えることを目的としていた。この過越の祭りは、その先にある全人類のための過越、すなわちキリストが全人類の罪をその身に負い、十字架にかかれて、命を捨てられることも見据えていたとも言える。

「世にいるご自分の者たちを愛してきたイエス」とあるが、ご自分のものとは、弟子たちのことを指している。もともとすべての人が、キリストのものではなかった。すべての人は、神の目から見れば、失われたものだった。しかし、そこからイエス様は私たちを呼び出してくださり、イエスキリストに従う者としてくださり、ご自分のものとしてくださった。まさに弟子たちは信仰によりキリストのものとされた人たちと言える。そして「世にいる」とあるように、世と深く関わりながら、しかし世のものではなく、キリスト

のものとして生きる。その中でキリストのものとされた弟子たちは、罪を犯すこともあり、さまざまな弱さや欠点もあった不完全な者たちでしたが、キリストは最後まで彼らを愛された。最後に十字架にかかれることで、自分のものとされた一人一人に対する愛を完全なものとした。

- ① 「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」（15章13節）と言われたとおり。

ハイデルベルグ信仰問答の問い1 「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」とあり、答えとして「わたしがわたし自身のものでなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエスキリストのものであることです。」

慰めは、私たちの心を置くべき拠り所、確信、あるいは助けと説明されている。つまり、自分が一生涯を貫いて常に自分が全幅の信頼を置くべき、私たちが体も魂もすべてを任せてよいという、その拠り所は何かということ。日々生きる中で将来のこと、子どものこと、結婚、仕事、お金、老後のこと、健康、介護など悩んだり苦しんだり、心痛める中であっても、またこの地上の生涯が終わって、すべてのものが取り去られ、すべてのものを手放さなければならなくなった時に、心の拠り所となるのは何かということ。それは、わたしの体も魂もわたし自身も、わたしのすべてがイエスキリストのものであるということ。一人で悩んだり苦しんだり、そして誰も分かってくれないと思うことがあっても、わたしはキリストのものとされ、キリストがご自分のものである私自身のことをよく知ってくださり、慰め、励まし、助けてくださる、そして私がこの地上の生涯を終えるときにも、一人で孤独に死を迎えるのではなく、キリストのものとされている私自身は、死がキリストと私を分かちことなく、永遠までもキリストのものとして、主であるキリストとともにいると確信することができる。そして、答えの後半に「主キリストは、

尊き血潮をもって、わたしの一切の罪のために完全に償ってください、悪魔のあらゆる力から、私を救い出し、また今も守ってくださいます。」と
言われている。キリストは私たちをご自分のものとするために、十字架の上で
尊い血を流してくださった。キリストは、ご自分のものである私たち一人
一人を最後まで愛され、十字架にかかって死なれた。キリストは私たちが愛さ
れる資格のある者だからとか、私たちが愛されるに足るものだから、私たち
をご自分のものとされたのではない。むしろ愛される資格のない者をキリス
トは最後まで愛されたのは、ただあわれみのゆえです。そのことに心から感
謝をし、また私たち一人一人が世にいるキリストのものとされていることに
心から感謝をし、私たちに対するキリストの愛、特に十字架で示されたキリ
ストの愛に心からの感謝をささげたい。